

受験番号

2026年度入試

神戸国際中学校 B選考

国語

(2026年1月18日実施、50分、100点満点)

(注意)

- 1 解答用紙と問題冊子の両方に必ず受験番号を記入してください。
- 2 全ての問題に解答してください。
- 3 解答は全て解答用紙に記入してください。記入方法を誤ると得点にはならないので、十分に注意してください。
- 4 試験終了後、解答用紙と問題冊子の両方を提出してください。

□ 一の文を読んで、後の問いに答えなさい。解答に字数の指定のある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。(本文に一部表記を改めたところがあります。)

現代人は総じて、感覚的に捉えることが苦手な人が増えています。都市社会、情報化社会では、社会が感覚を消していく方向に進んでいくからです。なかでもテレビの責任は大きい。

テレビはとても強力な視覚メディアです。テレビの映像は、一見、公平・客観・中立なものに見えますが、テレビの映像はカメラマン個人の視点です。テレビが※普及して以来、一個のカメラが撮っている映像を全視聴者が見るといふ、非常に異常な事態が続いているのです。

そうすると何が起るか。視聴者は、その一つの視点が現実であるかのように感じてしまう。一人の視点を全員が共有できるような錯覚が生じるのです。

現実の人間は視点を共有することなんてできません。全員、違うものを見ている。ところがテレビばかりにa没頭すると、①そこを忘れてしまいます。これはとても危険なことです。

私は講演でよく、こう話しかけます。「皆さん、一人ひとりが見ている『養老孟司』には、一つとして同じものはありません。座っている場所も違えば、見ている人の背の高さも違うのだから、当然です。(A) そのように「違う」ことを忘れてしまっている人が多い。②感覚が鈍るとはそういうことです。

感覚は身体的なものです。(中略)リンゴが二つあればそれぞれ違っていると感ずるのが感覚です。(B)、三人が一つのリンゴを見ても、三人そ

れぞれ見え方が違うのが感覚です。それを「一つのリンゴ」と認識するのは、※概念の力です。

感覚が落ちると、言葉や概念の重要性にも気づけなくなります。感覚が抜けた人たちは思考のすべてが言葉から始まってしまふ。※初めに言葉ありき、になるのです。

私の「寒い」と他人の「寒い」は、感覚としては同じはずがありません。身体が違うのですから、感覚を共有することはできない。人によって感覚はそれぞれです。しかし、「寒い」という概念を共有できなければ、話は進みません。だから「寒い」という言葉が必要になるのです。

こういうふうには感覚の世界は人それぞれ全部違うということがわかっていけば、言葉を「ありがたいもの」だと感じます。感覚だけではわかり合えなかった事柄を共有できるようになるからです。

ところが概念的思考だけが肥大してしまい、言葉の世界から始まってしまふと、そのありがたさがわからなくなります。③話が逆になる。通じることが当然であると思ひ込んでしまふのです。

そうすると、通じないことのほうが大量にあることになかなか思い至らなくなりまふ。(C)、ちよつと通じないだけで不安になる。あるいはわかってくれないと文句を言う。

結果として、現代の人は人間関係まで※明文化して、細かく決めなくてはいけないと思つています。人間関係も情報化すれば良い。そうすればうまくいくと思つています。結果として、ますます感覚は落ちていく。④その※成れの果てが※SNSです。

SNSには身体がありません。純粹脳化社会です。身体がないので、

言葉、概念だけでコミュニケーションをする。概念の力は「同じ」をつくることです。違いは認めない。SNSそのものじゃないですか。

一方で、身体や感覚がないのだから、言葉のありがたみがわからない。

だから粗末な言葉、乱暴な言葉を出すことにも※躊躇ちゅうちゅうがありません。目の前に相手がいたら言えないことも、平気で言えるのがSNSでしょう。

実際にスマホやパソコンの前には生身の身体があります。気に入らない文章を読めばイライラする。怒鳴りたくなる。感覚がなくなったわけではない。でも、その感覚をcサツチさつちしてくれる相手の身体や感覚がな
いわけです。

身体や感覚のイライラをまた概念でなんとかしようとするから、言葉はどんどん⑤エスカレートしていきます。SNSで過激な言葉で他人を非難して、それなりのリアクションが返ってきたりすると、その瞬間は気持ちが悪くするでしょう。しかし、ほんの一瞬のことです。その人自身の問題が解決されたわけではなく、単に先送りされただけです。SNSを離れば、前と変わらない日常が待っています。

(D)、またスカットしたくなりSNSに戻ってくる。自分の言葉に対する※フィードバックが心地よいことを覚えると習慣になり、過激さはエスカレートしていきます。

こうしてSNSは始終ギスギスし、あちこちでdエンジヨウしじょうが起こるのです。

(養老 孟司 『ものがわかるということ』)

※普及…広く行きわたること。

※概念…物事の共通する性質や特徴をまとめて、心の中に作った「大ま

かな理解」のこと。

※初めに言葉ありき…言葉が最初にあった、というキリスト教の聖書の言葉。

※明文化：物事の共通する性質や特徴をまとめて、心の中に作った枠組みや大まかな理解のこと。

※成れの果て…落ちぶれていった結果のありさま。

※SNS：ソーシャル・ネットワーク・サービスの頭文字をとったもの。具体例では、Xやインスタグラムなどが挙げられる。

※躊躇：あれこれ悩み決心できず行動に移せないこと。

※フィードバック：相手の意見や行動、成果などに対して自分の意見や感想を伝えること。

問1 || a & d のカタカナを漢字に直し、漢字はひらがなで読みを答えなさい。

問2 (A) (D) に入る言葉として最も適当なものを、次の

A ~ E からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

A あるいは I だから U すると E ところが

問3 | ①「そこ」とありますが、どういうことですか。三十字以内で答えなさい。

問4 | ②「感覚が鈍る」とありますが、どういうことですか。四十五字

以内で答えなさい。

問5 —③「話が逆になる」とありますが、どういうことですか。次の文章の空欄（1）・（2）に入る適当な語を本文中から抜き出して答えなさい。

人によって異なる（1）を他の誰かと共有するためには概念の力がある。そのときに（2）が必要となるが、（2）から話を進めてしまうと（1）が人によって違うという大切な前提を忘れること。

問6 —④「その成れの果てがSNSです」とありますが、筆者がSNSを問題だと考える理由として適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 情報が多すぎて、正しい情報を選ぶことが難しいから。
- イ 身体や感覚を間に入れず、言葉や概念だけで人と関わるから。
- ウ 無記名で意見を書き込めるため、責任感がなくなるから。
- エ 若者が長時間ずっと利用し、勉強時間が減るから。

問7 —⑤「エスカレート」と同じ意味の熟語を、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 流通
- イ 増大
- ウ 操作
- エ 減少

問8 本文の内容として適当でないものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア テレビの映像は一人の視点にも関わらず、客観的に見えてしまう。
- イ 感覚は身体と深く結びついており、人によって異なるものである。
- ウ 言葉は、感覚の違いを乗り越えて人と理解し合うために必要である。
- エ SNSでは、相手の身体的な反応を直接感じ取ることができる。

二 次の文を読んで、後の問いに答えなさい。解答に字数の指定のある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。（本文に一部表記を改めたところがあります。）

「奪えない この青い春 何人も」
なんびと

クラスのみんなが黒板に注目するなか、ひとり他人ごとのように窓の外を眺めていた音々の耳に「五・七・五」のリズムがまるで歌のように届く。

①日本語のはずなのに、たった十七音のはずなのに、それは外国の歌のように聞こえた。

「奪えない この青い春 何人も」
もう一度、歌われ、いや、読みあげられてやっと音々はそれが、自分が書いた「※スローガン」だと気づく。

顔を九十度方向転換。音々の両目は、外の空から、教室の黒板を捉え

た。

春の空の青さと、教室の黒板の緑は、その距離も明るさもあまりにも違いすぎて、焦点がすぐに合わない。②音々は、まぶたをパチパチと二、三回またたかせた。

音々の視界の解像度があがっていく。

【奪えない この青い春 何人も】

黒板の中央には、チョークで書いたとはとても思えない綺麗な字で、そう書かれていた。【何人も】の下には、「正」の字がたくさん並んでいる。

「それでは、二年二組のスローガンは『奪えない この青い春 何人も』に決定します」

学級委員として教壇に立っている天神てんじんくんが、高らかに宣言した。窓際の席に座る音々は口を大きく開け、（A）としてしまう。どうしてこんなことに、と頭を抱えなくなった。そうだ、そもそものはじまりは、校長先生のせいだった。

音々の通う中学校では、五月に体育祭が開催される。いろいろな準備が並行して進められるなか、連休を前に、校長先生からある「お題」が出された。

「クラスを□させる「スローガン」をみなさんで考えてください。」

体育祭は、学年混合で赤組、青組、白組に分かれて開催されるのだからクラス単位の□なんて関係ないのでは、と先生たちも含めて誰もが首をかしげたが、マイペースな校長先生はみんなの反応など気にしないようだ。

「もし進むべき道に迷ったら、面白いほうへ、が私の※モットーです。」

毎度全校朝礼でそう宣言する変わり者の校長先生は、厄介なことに、やると決めたらすぐやる行動力と決断力を持ったひとだった。

結局、連休明けに各クラスで体育祭に向けたスローガンを決め、垂れ幕にして教室の窓から吊るすことになってしまった。

今日のLHRは、そのスローガン決めが主な議題。

スローガンなんてどうでもいい、と思ったが、ひとり一案は考えるのが絶対というところで、音々も参加せざるを得なかった。

しぶしぶ一案だけ考えて提出した。その後すべてのスローガンの中から自分がよいと思ったものを選んで紙に書き、二つ折りにして、投票箱にイン。

なんだか選挙みたいだ。まだ選挙権もなくせに、音々はそんな感想を抱いていた。

正直なところ、自分の案が選ばれることなどないと思っていた。クラスの中でいちばん「□」という四字熟語に遠い存在が自分だという自覚が音々にはあった。

③なのに、だ。実際には音々の案が選ばれてしまった。途端に嫌な予感が（B）と湧き上がる。

「これ考えたの、誰だよ！」

予感的中。クラスでいちばん声の大きい鹿沼朋希しかぬまともきくんが、いつも以上に大声で、教室中に質問を投げかける。

「えく、あたしじゃないよ」

「オレでもねーし」

「そりゃ、そうでしょうね」

「どういう意味だよ！」

「ふっふっふっ、みんなやつと俺の文才に気づいたようだね」

「やかましい！ 座とけ。毎回漢字の小テスト十点のくせに」

鹿沼くん的一声をきっかけに、一気にざわつくクラス。みなが発案者という名の「犯人」探しに夢中。お互いに顔を見ては、「おまえじゃないの？」と言い合っている。

こうなることは予想できた。うちのクラスはいい意味でも悪い意味でも常にテンションが高い。それが音々は苦手だったし、いちばん巻き込まれたくない「ノリ」だった。

音々は、クラス中を交差している視線に交わらないように、机に突っ伏した。

「あれ、どうしたの松尾さん？」

「気分でも悪いの？」

みんなと違う行動をとったことが裏目に出てしまった。余計に注目を浴びる結果に。

「もしかして、これ、松尾が考えたんじゃないかね？」

再び鹿沼くんの大声が教室中を震わせる。ついでに、音々の心臓も震える。普段無神経そうな※キャラなのに、どうしてこういうところは鋭いんだ。

音々は自分の頭頂部に、肩に、背中に、クラス中の視線が集まっているのを感じた。

まるで虫眼鏡で光を一点に集められているかのように、クラスメートの刺すような視線は、熱を帯び、いまにも（C）と煙を出しそうだった。

「は、はい、はい、はい。無記名で書いた意味い〜」

教壇のほうで、大声ではないのに、よく通る声があった。④天神くんの声だ。

音々はつねづね思っていたが、学級委員の天神くんは、いつもまるで歌っているかのように話す。聞き取りやすい発声と、流れるような滑舌かっせつ。

そして、それらを可能にしている、計算され尽くした言葉選び。音々はそれをうらやましいと思っていた。

「確かに〜」

「至くんの言うとおりだね」

「ほら、鹿沼あ。ピークワイエット！」

クラスを中心グループの女子たちが、口々に天神くん賛同する。

さきほどまで刺さるように痛かったクラスメートからの視線がどこかにいつってしまった。音々は、そろりと頭を上げる。

「誠に申し訳ありませんでしたあ！」

鹿沼くんが、がたんと勢いよく立って、天神くんに向かって頭を下げた。しかも、額が自分のスネにつきそうなくらい「ペタン」と、二つ折りに。

「はははっ！ どんな最敬礼だよ！ つか、身体柔らかいな、朋希」

天神くんが愉快そうにツツコミを入れた。それをきっかけにどつと笑いが起こる。

ムードメーカーとは天神くんのような人間のことを言うんだろうな、と音々は思った。空気を変えるどころか、⑤教室ではまるで空気のように存在を消している音々としては、天神くんと同じ空間で、同じ空気を吸っていること自体が不思議に感じられた。

「でも、ほんと、ダントツでこのスローガンが一番だったね」

天神くんは黒板を振り返り、「改めて」といった感じでそうつぶやいた。
【奪えない この青い春 何人も】

音々は改めて【正】の字を数えてみる。全部で六個。音々のクラスは全部で三十四人だから、ほとんどの人間が音々の案に投票したことになる。

「青春」という言葉が持つ魔力のようなものを音々は感じた。思いがけず二年二組のスローガンとなってしまうが、これは、音々の本心でもなんでもない。

「奪われる 青春なんて 持っていない」

本当はそう書きたかった。音々に「青春」なんて（D）したものは似合わない。いや、そもそも「青春」のほうが音々なんてお断りだろうと思っていた。こんな、友だちのひとりもない「ぼっち」の自分なんて。

（百舌 涼一 『17シーズン 巡るふたりの五七五』）

※スローガン：ある組織・団体の主義や主張などを短く言い表した語句。

※モットー：心掛けている目標や行動の方針。

※キャラ：キャラクターの略。性格や気質。

問1 （A）（D）に入る言葉として適当なものを、次のア～エからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア ぶすぶす イ キラキラ ウ むくむく エ ぼかん

問2 —①「日本語のはずなのに、たった十七音のはずなのに、それは外国の歌のように聞こえた」とありますが、どうしてですか。その理

由を五十字以内で答えなさい。

問3 —②「音々は、まぶたをパチパチと二、三回またたかせた」とありますが、このときの「音々」の様子として適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 突然のまぶしきで目が痛み、痛みをやわらげようとした。
イ 現在の状況に混乱し、もう一度確かめようとした。
ウ 教室の空気に耐えきれず、眠気を追い払おうとした。
エ 黒板の字がかすれて見えたため、目をこすろうとした。

問4 空欄□には同じ四字熟語が入ります。空欄に入る適当な四字熟語を、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一喜一憂 イ 一致団結 ウ 心機一転 エ 悪戦苦闘

問5 —③「なのに、だ」という表現から読み取れる「音々」の気持ちとして、適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 期待していなかった出来事が起き、戸惑いと不安を強く感じている。
イ 自分の考えが正しかったと証明され、誇らしい気持ちになっている。
ウ クラスの反応が予想通りで、自分の性格が理解されて安心している。
エ わがままな校長先生の言動に腹を立て、心から怒りを感じている。

問6 ー④「天神くん」とありますが、「天神くん」の人物像として最も
適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 周囲をすぐに支配しようとする強引な人物。
- イ いつも感情をあまり表には出さない冷静な人物。
- ウ 場の空気を読み、自然にまとめる力を持つ人物。
- エ 自分の意見を曲げずに主張することができる人物。

問7 ー⑤「教室ではまるで空気のように存在を消している」とありま
すが、ここに使われている表現技法を次のア～エから一つ選び、記号
で答えなさい。

- ア 倒置法
- イ 直喩ちゆ
- ウ 体言止め
- エ 隱喩ゆ

問8 本文の内容として適当でないものを、次のア～エから一つ選び、
記号で答えなさい。

- ア 音々は、自分の案がスローガンに選ばれるとは思っていなかった。
- イ クラスは、鹿沼くんの発言をきっかけに一時的に混乱した。
- ウ 天神くんの発言によって、クラスの雰囲気は落ち着いた。
- エ 音々は、スローガンが選ばれたことをとても誇りに思っている。

【三】 次の①～⑤の意味に当てはまる慣用句を、次のア～クからそれぞれ
一つ選び、記号で答えなさい。

- ① 文章などを読んで、内容を確かめること。
- ② うっかり秘密などを言ってしまうこと。
- ③ 多くの人と知り合いであること。
- ④ 恩があつて、相手に強く出られないこと。
- ⑤ 隠し事をせずに、本音で話し合うこと。

【慣用句】

- ア 口を滑らせる
- イ 目を通す
- ウ 顔が広い
- エ 腹を割る
- オ 頭が上がらない
- カ 足を引っぱる
- キ 腰を上げる
- ク 手に汗を握る

【四】 次の文の【 】の部分の主語を、例に合わせてそれぞれ抜き出して
答えなさい。

(例) 綺麗な青い鳥が山の中で【鳴いている】。↓鳥が

- ① 遠くの山から雷の音がだんだん【近づいてきた】。
- ② 先生に渡す予定の作文がリュックの底で【くしゃくしゃになっ
た】。
- ③ 友だちが教えてくれた本の題名を私は【思い出せない】。
- ④ 祭りの屋台の前では甘い匂いが人々を【引きつけている】。